

[巻頭言]

## 人間中心の情報システム — 哲学と看護学が教えてくれること —

砂田 薫

情報システム学会 会長

### ■今道友信「情報と倫理」

情報システム学は、管理工学、計算機科学、経営学、心理学、認知科学、社会学など幅広い参照学問領域を持ちつつ、また基礎情報学、情報処理学、経営情報学をはじめとするさまざまな情報系学問と密接に関連しつつ、発展してきました。そうしたなかで、本学会が2005年の設立記念の総会にお招きしたのは哲学者の今道友信先生でした。「情報と倫理—21世紀の倫理—」と題した今道先生の特別講演は、17年経た現在でも決して古びることなく、むしろ心にとめるべき大切なことばとしてわたしのなかではますます輝きを増しています[1]。

今道先生はこの講演で、「(1980年頃から)技術が道具であるという性格をもちながら環境になっている」と指摘したうえで、「人間はその道具を使えばほぼ万能になり、多くの欲望が満たされるので幸せになると思ってしまう。しかし、本当の幸せは欲望の達成の充足感ではなく、何か本当に正しく生きているという心の充足感である」という主旨の発言をされています。また、情報システムや情報社会が堅実に進展するのは良いことだが、同時に、それは「良い目的」に向かっていくことが大切で、新しい目的を考える姿勢を人間はもたなければならないとも語られています。

### ■浦昭二の思想

本学会設立で中心的役割を果たされた浦昭二先生は、2008年1月発行のメルマガで「情報システムには人の意図が含まれる、方向性がある」「情報システムとは人間を育むシステムである」と話されました[2]。つまり、浦先生にとって、今道先生の言われた良い目的とは「人間を育むシステム」を実現することであり、情報システムはそこに向かおうとする人の意図と方向性を持つものだというわけです。今やビジネスの世界でも「幸福」や「生きがい」への関心が高まり、「生産性・効率化・売上・利益」だけを重視するのではなく、もっと良い目的、新しい目的を考えようとする人が増えてきたように感じます。いわば、人びとの意識の根本的な変化が日本社会に起こりつつあるのではないと思われるわけですが、すでに故人となられた両先生はそうした価値転換の先導的役割を果たされたのだといえるでしょう。

### ■HIS 概念

さて、本学会の皆さまのなかには、学会が発行した『新情報システム学序説』や『人間中心の情報システム学 その歩みと未来—浦昭二の世界』等の書物を読まれ、「人間中心の情報システム (Human-oriented Information Systems : HIS)」の概念について自分なりのイメージや考えを深めてみたいと思われている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。わたしもそのひとりです。そのためには、これまで見てきたように哲学は重要な示唆を与えてくれますが、わたしは看護学が教えてくれることもけっして小さくはないと考えています。とくに、「人間を育むシステム」とは何かを考えたとき、フロレンス・ナイチンゲールとヴァージニア・ヘンダーソンの著作からは大きな刺激を受けました。

### ■科学者ナイチンゲール

看護学の誕生とされているフロレンス・ナイチンゲールの『看護覚え書』[3]が出版されたのは1859年です。クリミア戦争に看護師として従軍したナイチンゲールは、兵士の死亡原因が戦闘死よりも不衛生な環境がもたらす死が多かったのを見て、衛生環境の重要性を強く訴えました。説得力を高めるためにデータを分析してグラフで示したので、看護学だけでなく統計学の先駆者としても高く評価されています。『看護覚え書』は、看護師は病人だけでなく病室にも気を配らなくてはいけないとして、換気をはじめとして患者が置かれている衛生環境の改善を重視して執筆されています。

### ■ヘンダーソンの人間観

それから1世紀を経た1960年、ヴァージニア・ヘンダーソンの『看護の基本となるもの』[4]が出版されました。この100年間で衛生環境の改善が進んだという背景もあると思われますが、ヘンダーソンの看護論は環境よりも人間に焦点を当てているのが特徴となっています。彼女は、看護師の役割とは「病人であれ健康人であれ各人が、健康あるいは健康の回復（あるいは平和な死）に資するような行動をするのを援助することである」と述べています。そして、人びとの欲求は無限に多様な生活様式によって満たされていることを

理解し、いかに賢明で一所懸命つとめる看護師であっても、看護師が考えている意味ではなく、「看護を受けるその人にとっての意味」を大切にすべきだと強調しています。この考えは、人間は快樂や権力を求める存在と言われるものの、何よりも人生の意味を問う存在であると考えたヴィクトール・フランクルの思想にどこか通じるものがあるように思えます。

## ■「人間を育む」看護学の視点

わたしは、この二人の著作から「人間を育む」という強い意図と姿勢を感じます。ナイチンゲールは「この世の中に看護ほど無味乾燥どころかその正反対のもの、すなわち、自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただなかへ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである」と記し、女性の社会進出が厳しく制限されていた時代に看護師という誇りある仕事を通じて女性が成長していく道を切り拓きました。また、ヘンダーソンは患者に対して、身体状況の改善だけでなく、意思の伝達、信仰や善悪の判断に従った行動、生産的活動や職業、学習、リクレーションなど、心の充足感や人としての成長を助ける重要性を強調しました。

## ■おわりに

「情報システムとは人間を育むシステムである」。これが浦先生の「人間中心の情報システム」の核心ではないかとわたしは考えています。むしろ、わたしとは異なる視点から「人間中心の情報

システム」についてより深くお考えの会員はたくさんいらっしゃるでしょうし、わたしの見解への異論もあると思います。

今年は浦先生の没後 10 年にあたります。学会にとっての良い目的をあらためて確認したり考えたりする節目の年といえるかもしれません。活発な議論や対話を通じてともに未来を展望できればと願っています。

## 参考文献

- [1]今道信友先生の講演録,  
[https://www.issj.net/journal/jissj/Vol11\\_No1/A1.pdf](https://www.issj.net/journal/jissj/Vol11_No1/A1.pdf).
- [2]浦昭二先生のインタビュー,  
<https://www.issj.net/mm/mm0209/mm0209-1.pdf>.
- [3]フロレンス・ナイチンゲール著, 湯槇ます他訳,  
“看護覚書き,” 現代社, 第7版第6刷, 2015.
- [4]ヴァージニア・ヘンダーソン著, 湯槇ます・小玉香津子訳, “看護の基本となるもの,” 新装版第11刷, 日本看護協会出版会, 2015.

## 著者略歴

### 砂田薫 (すなだかおる)

国際大学 GLOCOM 主幹研究員。総務省情報通信審議会専門委員, 国立研究開発法人日本医療研究開発機構「認知症対応型 AI・IoT システム研究推進事業」プログラムオフィサー, 独立行政法人科学技術振興機構・社会技術研究開発センター「人と情報のエコシステム」領域アドバイザー等を務めている。